

家事は家族で役割分担  
全員でお母さんを助ける  
**大塚さんご家族**

保育園探しが最大の難関

大塚秀幸さん（49歳）、直美さん（44歳）夫妻には、この春中学1年、2年生になった二人の娘さんがいます。

直美さんは独身時代、銀行などにお勤めでしたが、30歳でメーカー勤務の秀幸さんと結婚。31、32歳と続けて出産、専業主婦をしましたが「向いていないな」と思い（笑）「仕事を探すことに」。

しかし時は5月。子どもを預ける保育園探しは、年度の途中と、就業証明書がないので、まず無理とわかり、結局3年間はパートをしたそうです。

その後次女が年少に上がったのを機に派遣会社の営業の正社員として再就職したものの、今度は長女が小学校に上がり、保育園より早い5時に帰って来るようになったため、また退社。

「子どもの成長に合わせて、働き方を変えてきました」と話す直美さんですが退社後は人材紹介業の資格を取るなど、次の仕事の準備を地道に進めます。

の 平成家族  
大塚さんファミリー



子どもに合わせて働き方を変える

そして38歳で再度就職するも、リーマンショックの余波を受け、またも退社。その後はキャリアカウンセラー職として別会社に就職、現在に至ります。

出産後の4年間以外、ほとんどずっと働いてきた直美さんですが、「基本的には家事は私がいします。収入面では夫がメインですので（笑）。その代わり、外で自由に働かせてもらっ

ていますし、夫は理解をもってくれて、私ができない時は子どものお迎えでも食事の仕度でもやってくれます」。

「食事の仕度は半分趣味。酒の肴が多いです（笑）。妻の方が朝早く起きて疲れているから、臨機応変に手伝います。子ども達にも『お手伝いしなさい』と言ってやっているのだから、皆で家事を分担して、お母さんを助けるのは当然。ルールで決めているわけではなくて、状況に合わせて、最適な方法で助け合うのがいいんじゃないかと」（秀幸さん）

娘さん達のしつけはかなり厳しく、「人に迷惑をかけない、礼儀正しくな

ど基本的なことを言われました」（長女）。小さい頃は空手道場やガールスカウトにも通わせたのだそうです。

「空手は日本の武道を覚えられ、護身にもなる。ガールスカウトはサバイバルを学べます。でも今はそれぞれが好きな道に進んでますね」（秀幸さん）

「思いやり」が家事分担の基本

「結婚後の4年間専業主婦をしたのは、夫に望まれてるのかなという、私の勝手な思い込みだったんです。でも、今と違って新興住宅地の社宅で、子どもとしか話さない毎日でストレスが溜まってしまっただけ」という直美さんに「それは見て取れました。だから妻が働いて楽しそうにしているのを見る方が、自分も嬉しい」と秀幸さん。家事や育児など、家庭内の役割分担は、まずお互いの思いやりあつてのものだと、夫妻の言葉に納得させられます。

「お互い苦手な家事はありますよね、それは得意な方がやるとか、調整が必要。家庭は会社じゃない。『あなたダメだから辞めてください』というわけにいかないですから（笑）」と直美さん。

これからはおそらく女性も、ずっと働き続けなければならぬだろうと、その時はいろんな働き方があるんだよと娘達に教えたい、とご夫妻。

「仕事を通して、協調性、柔軟性など、優秀な女性が多いと感じます。昔は終身雇用が前提で、夫が働いて妻は家事、育児という構図が成り立った